

越後村上歴史

【村上藩の起こり】

平安時代(794-1185)には、藤原家の一族中御門家が支配する「小泉荘」という荘園が岩船郡(現在の村上市から朝日村)にあった。後に新しい領域が加わり、古い地域を「本庄」、新しい地域を「加納」と呼ぶようになった。

鎌倉時代(1185-1333)の文治元年(1185)に源平争乱の世を制した源頼朝が全国に守護・地頭を設置し鎌倉幕府を興すと、武蔵国秩父郡の坂東八平氏のひとつで平将門の女系子孫でもある秩父家が小泉荘の地頭に任命された。この秩父家は、頼朝の重臣として源平合戦で輝かしい戦功を立てた畠山重忠の弟重宗を祖とする。

本庄には秩父行長が入り本庄行長と改名、また加納の色部条にはその弟為長が入り色部為長と改名し、以後は土着した国人領主となった。

当初、本庄家は猿沢(現在の朝日村)に極めて堅固な居所を築いたが、狭く不便であったために、室町時代(1336-1573)の明応年間(1492-1501)頃に村上に居所を移した。しかし、当時の村上は未開拓だったため、本庄家は標高135メートルの独立峯村上山(臥牛山)の一带に堅城 村上城を築城した。この時の築城主は本庄房長である。だが房長は一族内紛の末に憤死したが、跡を継いだ嫡子本庄繁長は内紛を制して越後北部に強大な勢力を築いた。

繁長は上杉謙信に仕えて「鬼神」とまで称された勇将であった。一時期は謙信を裏切り武田信玄に通じて、謙信を大いに苦しめたこともあったが降伏して許され、謙信没後は跡目を継いだ養子上杉景勝に仕え、景勝から「竹に飛雀の紋」を賜り、また「上杉景信の名跡」を継ぐことを許されて上杉一門として優遇された。この「竹雀の紋」は本庄家と山浦家のみに許されたものである。

村上の上杉家は本拠春日山城に次ぐ軍事都市として発展し、安

土桃山時代(1573-1603)の天正16年(1588)には本庄繁長は最上義光と戦い、「十五里ヶ原の戦い」で最上軍を撃破し、庄内地方をも制圧した。

繁長が天正18年(1590)に村上を去ると、上杉家家老直江兼続の弟大国実頼の代官春日元忠が入った。

そして、この村上は、最上義光、伊達政宗ら奥州の雄を押さえるための戦略的に極めて重要な拠点となった。

慶長3年(1598)5月、上杉景勝が豊臣秀吉の命で会津に移封された後、堀秀治が越後の国主として春日山城に入った。この時に秀治の与力大名として村上頼勝(義明とも)が加賀小松より9万石で入り、名称を村上と改めたのが村上藩の始まりである、とされているが、これに関しては不確かな事が多い。その理由は、村上家の在城期間が2代と短いということと、江戸幕府の外様大名廃絶政策により取り潰されたため、史料が少な過ぎるということである。

現存する村上家の記録は、『徳川実紀』『廃絶録』『東武実録』などであるが、これらはいずれも江戸時代中期や後期にかけて書かれた史書であり、更に徳川方の史料であるから江戸時代前期に取り潰された村上家の記録としては贋目録(ひいきめ)に書かれている可能性があるとの指摘もある。この中で最も古いのが『東武実録』であるが、これには初代藩主を「村上義明」と記してある。しかし、原文では頼勝、忠勝の名はあるが義明の名は存在せず、誤記の可能性が指摘されている。

村上家の出自には、武田信玄に追われた北信濃の戦国大名村上義清の子で国清の弟とする説がある一方で、新井白石は家紋が「丸に上の字」で頼勝と同じであることから、伊予の村上二郎の後胤という別説を唱えている。

【村上藩 歴代藩主】

安土桃山時代(1573-1603)

江戸時代(1603-1868)

明治時代(1868-1912)

●村上家 (外様、9万石)

初代 村上頼勝(よりかつ)(義明とも) 1598-1604

二代 村上忠勝(ただかつ) 1604-1618

家中騒動が元で改易

●堀家 (直政系、外様、10万石)

三代 堀 直寄(なおより) 1618-1636

直寄が村上に入部の際、徳川家康より「百万石の禄を与えるという御墨付き」を所有していた。これを示して老中に百万石の請求をした所、老中は困り果てたが、百万石の「石」の字に虫食いがあるのを見つけ、「之は百万石に非ずして百万両なり、依って佐渡金山を向う三ヶ年取らすべし」と下命。

怒った直寄はこの金で村上城の増改築や士分の増員を行い、また江戸上屋敷に凌雲院や不忍池を作った。

村上藩主としては村上城下町の整備を推進し、現在の市街地の基礎を築いた。

四代 堀 直次(なおつぐ) 1636-1638

五代 堀 直定(なおさだ) 1638-1642

堀家、無嗣子により断絶

●本多家 (忠勝系、譜代、10万石)

六代 本多忠義(ただよし) 1644-1649

●観音寺本堂(観音堂)の建材を寄進

陸奥白河藩に転封

●越前松平家 (親藩、15万石)

七代 松平直矩(なおより) 1649-1667

●観音寺本堂(観音堂)を再建(内陣のみ現存)

豊後日田藩に転封

●榊原家 (譜代、15万石)

八代 榊原政倫(まさとも)

1667-1683

九代 榊原政邦(まさくに)

1683-1704

播磨姫路藩に転封

●本多家 (忠勝系分家、譜代、15万石から5万石に減石)

十代 本多忠孝(ただたか)

1704-1709

十一代 本多忠良(ただよし)

1709-1710

三河刈谷藩に転封

●大河内松平家 (譜代、7万2000石)

十二代 松平輝貞(てるさだ)

1710-1717

上野高崎藩に転封

●間部家 (譜代、5万石)

十三代 間部詮房(あきふさ)

1717-1720

十四代 間部詮言(あきとき)

1720

越前鯖江藩に転封

●内藤家 (信成系、譜代、5万石)

十五代 内藤弑信(かずのぶ)

1720-1725

十六代 内藤信輝(のぶてる)

1725

十七代 内藤信興(のぶおき)

1725-1761

十八代 内藤信旭(のぶあきら)

1761-1762

十九代 内藤信凭(のぶより)

1762-1781

廿代 内藤信敦(のぶあつ)

1781-1825

廿一代 内藤信思(のぶもと)

1825-1864

●文政11年(1828)5月9日 佛海上人ご生誕

廿二代 内藤信民(のぶたみ)

1864-1868

信思の養嗣子 信民は藩内における方針対立に苦しみながら、慶応4年(1868年)7月16日に早世した。

藩主不在となった村上藩を、村上藩最年少の家老で佐幕派の鳥居三十郎が主導権を掌握する。

廿三代 内藤信美(のぶとみ)

1868-1871

村上藩の最後の藩主。和泉岸和田藩主 岡部長寛の長男で、初名は岡部長美 (おかべ ながとみ)。

明治2年(1869)6月24日、版籍奉還により藩知事となる。

翌6月25日、村上藩家老鳥居三十郎は、奥羽越列藩同盟に参加して新政府軍との戦い(戊辰戦争)に敗れた村上藩の責任を一身に背負って安泰寺にて切腹。遺体は宝光寺に埋葬された。享年29歳。

辞世の句 「淡雪と ともに我が身は 消ゆるとも 千代万代に 名をぞ残さ武」



しかし、その後も戊辰戦争の影響が収まらず、藩内の対立は続き、同年11月9日、信思を政務の補佐に迎える。翌年の明治3年(1870年)6月9日、藩内の対立により、政府に進退伺を提出する。明治4年(1871年)7月15日、廃藩置県により村上藩は消滅して村上県となり、信美は罷免され東京に移った。その後、内藤家を去り、岡部家に戻ったと伝えられる。

同年11月、村上県は新潟県に吸収された。

●明治7年(1874)9月

佛海上人 観音寺(庫裡)再建